

勝利のループレシュート

- 1 -

「いいか、おまえら！ 死んでもVゴール決めるよ！」
監督の顔が真っ青になっている。

「今日という今日は、絶対に負けられねえんだ。もし、俺に恥をかかせてみる。そんなときや……
分かってるよな？」

怒りの表情が、不気味な薄ら笑いに変わった。

私たちは、額を流れる汗を拭うことも許されず、直立不動のまま、心臓が凍る思いでその罵声を聞いている。

20メートルほど離れた相手のベンチ前では、タオルで汗を拭ったり、スポーツドリンクを飲んだり、マッサージを受けたりしている選手たちが、驚きや侮蔑や同情の入り交じった眼を、ちらちらとこちらに向けている。

「分かってるんなら、返事しろ！」

「はいっ！」

控え選手も含めて、全員が大声をはりあげた。観客席から失笑が漏れた。

××杯女子ユースクラブチーム選手権〇〇県予選の決勝戦。

- 2 -

1対1の苦しい戦いだった。90分を過ぎても決着が着かず、延長戦に突入した。

監督の吉岡は、この大会が始まる一カ月前、前監督が地域リーグ一部の人権チームに引き抜かれた後釜として、私たちのチームにやってきた。28歳。名門大学の主力選手としてJリーグ入りも夢ではなかったというが、大学選手権で左膝を傷め、結局選手生活を断念し、コーチの道に入ったというが、実は、性格に問題がありすぎて、どのクラブも獲得に動かなかったというのが実情のようだ。

吉岡は、一言でいうと異常人格だった。練習の厳しさは、前監督時代とは比較にならない。ハードなのはもちろんだが、いまだき、こんな前時代的な訓練を課すコーチがいるのか、と呆然とするくらい、横暴だった。紅白戦の最中にいきなり笛を吹いてプレイを止めさせ、ミスした選手に平手打ちを喰わせるくらいはまだいいほうだ。茶髪にしていた選手を練習後に一人呼び寄せ、いきなりおっぱいをつかんで、

「え？ 高校生のくせに色気ぶきやがって。どうせ援交やってんだろ？ 毎晩、ホストクラブ通いか？ お前はスポーツ選手なんだぞ。女じゃねえんだよ」

と怒鳴りながら、いきなり股間を撫でたという。彼女はショックのあまり、チームをやめてしまった。

他にも、やめていった選手は多い。だが、吉岡は平然として言った。

「下手くそが何人いたって、しゃあねえよ。少数精鋭で勝ちにゆく。それが俺のやり方なんだよ」

彼は、地元のサッカー協会会長の甥なのだ。やめていった選手は、別のクラブを探したが、ここごとく妨害された。

彼には逆らえない。悔しいが、その現実を受け入れるしかなかった。

チームは勝ち進んだ。もともと、優勝候補だ。組み合わせにも恵まれた。当然、彼の叔父の政治力が働いたのだろう。他の優勝候補が主力選手の怪我で番狂わせで敗退したり、あやしい誤審があったり、ツイているというより、見えない手が働いているような印象もあった。

ホイッスルが鳴った。私たちのキックオフだ。私は、ピッチに入り、センターサークルで相棒のFWの香緒里と並んで立った。

「あの野郎……」

肩幅の広い長身の香緒里は呻くように呟き、ピッチに唾をはいた。

「勝ちたいって気が起こらない……」

「だめだよ」

私はなだめた。

「負けたら、何されるか……」

ホイッスルが鳴った。私はちよこんと前にボールを突き出し、香緒里が中盤に戻し、私たちは一気に敵陣へとかけあがった。

ボランチから、ロングフィードが前線に出る。香緒里がポスト役になって、ヘッドで私にボールを渡す。目の前にスペースがあった。ゴールが見えた。

「私は、思い切りボールをシュートした。つもりだったが、疲労のため足がもつれた。シュートミス。尻餅をついた。寄せてきた相手ディフェンダーがボールを拾い、前線にフィード。」

相手のFWが、ボールを受け、ドリブルで私たちのゴールに迫った。スピードのあるテクニシャンだ。だが、私たちのDFの由紀が巧みにボールを奪った。焦った相手が、背後からスライディング。由紀がもんどりうって倒れた。

ホイッスル。相手FWにイエローカードがつけつけられる。私たちのフリーキックだ。だが、異変が起こった。由紀が、足首を抑えたまま、動けないでいる。

由紀は担架に乗せられ、ピッチを出た。駆け寄った医者が、両手でバツマークをつくる。吉岡は真つ青になった。由紀は、私たちのチームのティフェンスの要なのだ。吉岡のハードすぎるトレーニングのため、控え選手も怪我人が多い。

吉岡は選手交代を第四の審判に要請した。靖子が呼ばれた。小柄でそばかすだらけの、気の弱い子だ。いつも、吉岡にいじめられていた。どう見ても、彼女をいじめて面白がっているとしたか思えなかった。

吉岡がニヤニヤしながら、靖子に話しかけている。アドバイスを与えている表情ではない。靖子の脚が小刻みに震え出した。プレーが止まり、靖子はピッチに入ってしまった。

「大丈夫だよ、靖子！」

香緒里が叫んだ。そして、私に囁いた。

「私が後ろにさがって守備する。あの様子じゃ、とてもじゃないけど、プレーなんかできないよ。あんたはトップに張って、カウンターのボール受けて」

私はスピードはそこそこあるが、フィジカルは強くない。相手のプレスを受けながらボールキープするのは苦手だ。だが、こちんこちにこわばっている靖子を見ると、そうするしかない、という気にさせられた。

なんで吉岡は、初出場の靖子をわざわざ緊張させるのだろう。こんなとき、前監督、いや、これまで所属してきたどんなチームのコーチも、選手をリラクセスさせ、勇気づけるよう務めていた。この男は、ほんとうに勝ちたいのだろうか。それとも、私たちを怖がらせ、独裁者然としていることに快感を感じているだけだろうか。

試合が再開された。相手のミッドフィルダーたちがショートパスを交換しながら、私たちのゴールに攻め込んだ。そのパスをカットしたのは香緒里だった。

「美紀！」

彼女が私の名前を叫び、前線に大きく蹴りだした。私は必死に落地点に向かって走った。だが、二人のディフェンダーに挟まれた。重い衝撃が左右から襲ってくる。私はピッチに這いつくばった。笛は吹かれなかった。

相手チームのカウンター。トップ下の選手がボールを受け、交代で入ったばかりの靖子めがけてドリブルを仕掛ける。靖子は無我夢中でタックルした。タイミングはやすぎ！ あっさりかわされた。

と、その前に香緒里がたちはだかった。相手はすつと左に抜ける。香緒里が右脚を大きくのばした。足首と足首が交差した。相手選手が前のめりに倒れる。いけない、ペナルティエリア内！ 審判が大きく右腕を差し上げ、笛を吹いた。

PK……！

吉岡がライン際に走り寄り、大声でわめいた。

この馬鹿！ ドブス！ 何やってやがる！

線審が顔をしかめ、吉岡に近寄って宥めようとした。すると、吉岡は線審を殴りつけたのだ。

主審が駆け寄り、レッドカードをつきつける。吉岡は真っ赤になってわめきながら、役員に控室に連れだされた。

最悪……。

私は頭を抱え、天を仰いだ。

「この、ばっかやろう！」

パーンと派手な音が響き、香緒里が頬を抑えて床に転がった。

「てめえ、サッカーなんざ、やめちまえ！」

吉岡が、香緒里の背中を蹴った。香緒里は顔を歪め、苦しそうに腹這いになった。

「お前のポジションはどこだ？ フォワードだろうが！ フォワードがなんで、あんなところで守備してんだよ！」

吉岡がまた、香緒里の脇腹を蹴った。

「やめてください！」

靖子が、吉岡と香緒里との間に割って入った。

「香緒里先輩は、私のカバーをしてくれて……私のせいです」

「そうだよ、おめえのせいだよ！」

吉岡は足をあげ、スパイクの底を、膝をついた靖子の頬に押しつけた。

「おめえらのせいで、負けちまったじゃねえかよ。全国大会に出て、いい成績残して名門から引き抜かれるっていう、俺のドリーム、どうしてくれるんだよ」

吉岡が靖子の顔を蹴った。靖子は仰向けに倒れた。唇が切れ、血が吹き出していた。

私は、拳を握りしめ、ぶるぶる震えていた。

怒りではない。怖かったのだ。彼の怒りの矛先が、いつ私に向けられるか、と不安でならなかった。

だから、吉岡が例の薄笑いを浮かべて私に視線を向けたとき、背筋が凍りつくような思いだっ

た。

「おい、おまえ……」

吉岡はツカツカと私に近寄った。

「もとはといえば、お前がボール奪われたのがきつかけだったよな……」

吉岡が私の髪の毛をつかんで引っ張った。涙が出るくらい痛かった。

「さんさんシュートミスするわ、ポストも満足にできないわ……。おまえ、最低のフオワードだよ」

私は眼をつぶり、全身の筋肉を固くして、次に襲ってくる激痛に備えた。よくて、平手打ち。

最悪の場合……。

そのとき。

「いつてえ！」

私の髪の毛をつかんでいた吉岡の手が離れた。私は眼をあけた。吉岡が、古傷の左膝を抑えて床にうずくまっていた。

その背後に香緒里が立っていた。顔を上記させ、怒りを押し殺した表情で吉岡を見下ろしていた。

彼女が、吉岡の左膝を蹴り飛ばしたのだ。

「いい加減にしろよな……」

香緒里は呻いた。

「だいたい、お前が無茶な練習やって、けが人増やしたのが原因じゃねえかよ……」

「な、何するんだあ！」

吉岡が甲高い声で叫んだ。香緒里を見上げた顔が……。なんと、泣いていた。

私たちは顔を見合わせた。それまでのこわもてが消え、いじめられる弱虫小僧のようだった。

「よ、よくもやったなあ！ ぼくの叔父さんは、ここのサッカー協会会長だぞ！ 叔父さんに言いつけてやるう！」

「言いつけてみなよ……」

声が出た。控室のドアが開いた。

「ユカリ！」

私たちは叫んだ。茶髪を咎められ、おっぱいを掴まれ、大事な場所を撫でられてやめた子だ。レザールのミニスカートに豹柄のタンクトップ。髪の毛を金色にして、ギンギンに化粧している。

「おまえがやったこと、週刊誌にばらすぞ」

彼女の手に小型テープレコーダーが握られていた。

「……ぼくのやったこと……」

「おまえ、あれからも、他の子の体さわったり、暴力振るったりしたろ？ 部室にこれ隠しておいて、全部録音させてもらったよ。大会中に公表するのは士気にかかわると思って自重してたけ

「どよ。どうせ負けたんだ。もう、黙っていられないんだよ」

吉岡は顔面蒼白で、ガタガタ震えている。

「ユカリ……やったね！」

香緒里がユカリに抱きついた。

私たちはわっとユカリに駆け寄り、体を叩き、彼女の功績を褒めたたえた。

「もう、我慢することはないよ。思い切り、仕返ししてやろうぜ」

「どうする？」

「ボコろうよ」

「ただ、ボコったんじゃ面白くないよね」

「そうだ！」

負傷退場した由紀が叫んだ。

「私たち、サッカー選手だよ。サッカーって何をするスポーツ？」

「え、ボール蹴って……」

「そ、こいつのボール、蹴ってやろうよ！」

一瞬、静まった。それから歓声が沸き起こった。

「やろうやろう」

「あれ、潰れると、男でなくなるんだよね」

「そうそう。すっげえ痛いらしいよ」

「私たちが味わった痛みを、味わってもらおうね」

「わあ！」

選手全員に詰め寄られ、吉岡はタジタジとなって後ずさった。

「や、やめてくれ……そ、それだけはやめてー」

私たちは目配せしあい、それ、と掛け声とともに吉岡にとびかかった。十数人がかりで吉岡を押さえつけた。吉岡の両手両足に三〜四人くらいずつがすがりつき、股を開いたかっこうで床に仰向けに固定した。

部屋の隅で、靖子だけがぼつんと立っていた。眼を見開き、驚いた表情だった。

「なにやっつてんのよ、靖子！」

私は叫んだ。

「こっち来て、蹴ってやんなよ」

「そうだよ、靖子、やっちゃえ！ やっちゃえ！」

全員が彼女を誘った。靖子は、最初は当惑していたが、やがて、「いいのかな？」と呟いた。

「いいよ。まず、あんただよ」

ユカリが励ました。

靖子は、おずおずと、しかし強い足どりで、吉岡の股間に立った。

「う……………うぐ……………」

吉岡が何か叫んだが、口は塞がれていた。

靖子が、まだピッチの土のついた右足のスパイクの裏を見せた。視線が、吉岡のジャージにわずかにもっこり盛り上がったその箇所注がれていた。

「えい！」

靖子のスパイクが吉岡の股間に叩きつけられた。吉岡がぐぐもった呻きをあげた。

「だめだめ、そこ、玉じゃないよ」

ユカリが言った。

「え、そうなの？」

香緒里が訊ねた。

「うん。そこはおちんちんだよ」

「よく、しつてんね〜」

由紀がからかうように言い、みんなどっと笑った。

私も笑った。女の子は、いざとなると残酷なのだ。

「あ、でも、血が出てるよ」

白いジャージの股間にちっちゃな赤い点が滲み出していた。

「皮が破けたのかな」

「なんだ、ミスキックじゃん」

それでも凄い。チームでもキック力の弱い靖子なのに。

スパイクをはくことで、私たちは戦闘モードに入る。普通の女の子じゃない、体をぶつけあう芝生の上の格闘技、サッカーの選手になる。

なめんじゃないよ！

「やっぱり痛いよね。冷や汗かいてるし」

「でも、玉ほどは痛くないみたいよ」

「よし、今度は、玉を狙いな」

「で……………でも……………」

靖子がまた当惑した表情になった。

「あそか。玉の位置ってどのへんなの？」

香緒里がユカリに訊ねた。

「う〜ん」

ユカリが吉岡の股間を見つめて一瞬考えこんだ。彼女には彼氏がいるのは知っていたけど、すぐに男の性器のありかをジャージの上から特定できるほど、経験は多くないみたいだった。

「このへんかな」

ユカリが、首から下げている携帯電話のさきつちよで、ちよんちよんと吉岡の股間をつついた。

吉岡は顔をぶるぶる震わせ、眼から涙をこぼしている。

「あ、これだ。これこれ」

血が滲み出ている3センチほど下を、ユカリは指さした。

「ここだよ。今度はよく狙って」

「インステップで、ちやくんと蹴るんだよ」

靖子のそばかすだらけの顔が輝いた。直接フリーキックを蹴る直前のベツカムのような神妙な顔つきで、呼吸を整えた。

「えい！」

ドスッと音が響いた。彼女の爪先が吉岡の股間をとらえた瞬間、彼はおおきく腹を突き出してのけぞり、激しく痙攣した。

「やったあ！」

全員が歓声をあげた。

「当たったみたい……」

靖子は息を弾ませ、肩を大きく上下させ、興奮していた。

「よし、次は誰？」

香緒里が周囲を見回し、それから、眼をぎゅゅとつむり、激痛に耐えているらしい吉岡の耳元で言った。

「全員、順番こで蹴るからね。覚悟しな」

「どの順番でやる？」

「背番号順じゃない？」

うぐん。私の背番号は22。いちばん最後になる。

決め技は、小学校のときに一度だけ成功したループシュート。アウトにひっかけて、すくいあげるように……。

それまで、潰れないでいてくれますように。